

6-2 ウエペケレ「ヌサコロカムイ イカオピューキ」解説

語り手：貝澤とうるしの
聞き手・解説：萱野茂

萱野：この huri っちゅうのはなんちゅうんだ？ そうすると。

貝澤：あれー、なに、何て言うべな？ おっきい鳥だわ。

萱野：ふーん。

貝澤：huri nitne h_i [フリの悪い奴]、ってゆうのは人間も殺してるんだもの。
tokpa [鳥がつつく] して。

萱野：これは、あのー、

貝澤：huri nitne h_i [化け物フリ] って言うの。

萱野：うん、そう、そう。よくそう言うふうのは聞こえる、聞くけどもさ。アイヌ語でそういうけど、日本語で何て言う？

貝澤：日本語って何て言うんだべなあ、おれも……

萱野：おっきい鳥だというだけで、その……

貝澤：おっきい鳥だというだけで……

萱野：本当にその形そのものがない……

貝澤：子供は押さえて [つかまえて] 飛ぶって言うんだよ。子供盗むんだって、食うんだっていうもの。

A氏：トビでないのか？

萱野：トビとも……

貝澤：トビでない。トンビでないんだ。huri nitne h_i ってもものもあるし、sicikap [オジロワシ] っていうものもあるし。

萱野：sicikap っちゅうのは普通

貝澤：sicikap は普通の鳥だ。

萱野：この uepeker [散文説話] は、これ nusakorkamuy i=kaopiwki [祭壇を司る神さまが私を助けた] ？

貝澤：うん。kane ay a=i=eotuknere (？)

萱野：うん、kane ay a=i=eotuknere (？) と言うけどな。

私は父がおり母がおり、私は父と母に育てられ何不自由なく一人前になった男であります。猟も上手だし、親を大切にし、というわけでごく普通ではあるけれども、特別雄弁とかそういうことではありませんが、普通に成長してきた一人のアイヌでした。

そうやって何不自由なく暮らしておるある日のこと、近くの村で一人の男がおって、それは沢山の物持ち、沢山の宝物を持っておって、無理難題といえ言えることは、近くに huri という鳥の、大きな鳥、それは日本語で何と言うのか、あるいはアイヌの社会での空想上の鳥なのかもしれませんが、その huri という鳥、これは日本語で分かりませんので日本語は使いませんが、その huri という鳥がどっさり一か所に住んでおる。

そこのその家から「一羽なり、一羽か何か、まあとにかくそれを殺して持って来いと、そうすれば私の持つておる宝物全部、誰にでもあげますよ」と。そして村々にそれを殺す人を募集しても誰もそれを殺してきた者もおらない。

そういう話を聞いた私の父や母は、「もしそういうことであんたのところへお使いが来ても決して行ってはいけませんよ」と、言われながらも、まあ興味ないわけではない。

そうしておるある夜のこと、夢を見たら夢枕に立った神様の言うのには、「私はあなたの家の nusakorkamuy だ」と。いわゆる外の祭壇を司る神様だと。その nusakorkamuy だが、「明日はあなたのところへお使いが来るでしょう。普通ではとても huri という鳥を殺すことも出来ないけれ

ども、あなたに今、金の弓と金の矢を貸してあげます」と。「だからこれを持って明日は行きなさいよ」と。「その他は成り行きにまかせなさい」と。そういうふうには夢枕に立った神様がおり、翌朝目を覚ましてみると、まあ夢だと思っておったのが、本当にその枕元には金の弓と金の矢があったと。

それを持って、これは本当だったんだなと思っておるところへ隣の村からのお使いが来て、「いくら誰を頼んでも全然それを捕ってくれる人がおりません。今度はどうしてもあなたにお願いしたいと、家の父から使われました」と、若い者が二人来た。

まあ、夕べ夢で知っておったので、すぐにその宝の矢、宝の弓を懐へ入れるとそれはそのまま一番肌身近くに隠しこんで、そして普通の矢と普通の弓を手に持って、その男たちと一緒にいった。そうすると、その隣村、と言ってもまあ夜、夕方までかかったのかそこへ到着してみると、そこのおやじは、見かけは立派なおやじがおって、丁重に **onkami** [男性の挨拶] というアイヌ特有の仕草で迎えられ、そしていろいろ話を聞いたら、「ぜひその鳥を捕ってほしい」と。

「そうすれば私の持つておる宝物は全部あなたに差し上げますから」こういうふうには言われた。そこへ猟に行った人たちが二人帰ってきた様子がある。それを家族のものが外へ出て知らせると、外でいわゆる猟用のまかない [身につけたもの] を全部といて、昔のアイヌの礼儀としてそうなんだが、外で **ker** [靴] をほどいたり、山行きの支度全部ほどいてきちっとして入ってくるのが昔のアイヌの礼儀であったわけなんです、それを **soyosipitatpa** と行って、外でまかない物 [身につけたもの] をほどいて入ってきた。そして私に丁寧な挨拶をするその挨拶の仕草を見ても、兄である人よりも弟の方が非常に立派で、挨拶の仕方も立派に挨拶し、挨拶されながら、まあその晩はそこで泊まった。

そして次の朝早く、その **huri** という鳥のいるところへ案内させた。で、ずっと遠くの方から「あそこだよ」と、言いながらだんだん近づいてみると、大きな木のいっぱい生えている林に、一羽や二羽でなく何十羽も何百羽もの鳥がおって、その鳥がこう羽をさすり合い、あるいは口ばしでつき合ったりしながら、こう飛んでるものもおれば、そこでただ座ってなんか人待ち顔と言え言えるような恰好でおるところへ行ったと。

そこへその恐ろしいその **huri** という鳥のいるところへ近づくと、その案内してきた男たちも今まで前歩いておったのも全部うしろへ下がっちゃって、一人でだんだん近づいた。

そこで私は夕べ、前の晩、神から、神様から授かったところの弓矢を手

に持ち直しながら、その huri たちに「私は私自身の気持ちで来たんでなくって、その隣村の悪い男の考え方であんた達を不本意ながら一羽殺すなり、持って帰るなりしたくて来たからよろしく」と、いうふうな事をアイヌ語で述べながらその弓に矢をつがえておった。そうすると一羽の鳥がずっと前へ降りてきたので、それに向かって矢を放すと一羽のその飛んできた鳥の片羽の付け根からポロリともげ落ちた。

それを喜んで「本当にありがとうございます。これを持って帰れば男にも話をする事が出来ますよ」と、そう言いながらこれを持って大急ぎで村へ、その、夕べ泊まった村へ帰ってきた。

そして帰ってきてそのおやじの上へその羽を叩き付けながら、「お前が欲しくて持ってきたものだよ。あんなに恐ろしい鳥のところにどうしてそういう無理難題をふっかけた。そういう事を今からも続けるのであれば生かしてはおけないけれども、これからそういうことのないように」と、うんと怒りながらその羽を置いたら、「やー今まで何人の人に頼んでも羽の一本も捕れなかったのに、よくまあこうして持ってきた」と。「まあ驚いたもんだ、たまげたもんだ」と、言ってるのをしりめにさっさと我が家へ帰ってきた。

そうすると次の日にどっさり、ikor という宝物をどっさり背負って私のところへ来たけれども、「ikor とかそうしたものの欲しくて私はやったものではないよ。なぜあんた達はそういう悪さをするのだ」と、うんと言ひ聞かせて帰してやった。その後に父にその話をしたら、その金の弓と金の矢はイナウに包んで神様へお返しをした。

そして私自身にも嫁をもらって、何不自由なく幸せに暮らし、隣村の悪さをする親父も死んでしまい、そのあと息子たちにも厳重に言って、そういう無理難題を人にふっかけることなく、今は幸せに平和に暮らしておりますと、一人の男が言いました。

というわけだな。

貝澤：そうだよ。